



李撰文選卷之三目錄

一 風賦
 二 讀風賦
 三 人序論
 四 雷辭
 五 幼童論
 六 名月賦
 七 十六夜對
 八 整編
 九 蕭瑟賦

交櫻
 六味
 桃溪
 六味
 杏溪
 友場
 桃溪



李撰文選卷之三目錄

十 大島若湯以島若湯傳

交楡

十一 時雨、沢

桃溪

十二 玉ね、僧

交楡

十三 色、穉

六味

李撰文選卷之三

一 風賦

交楡

渾沌よりきて忽よあまらむ其色のフウと安下より
 風と名付くかくとらふりも始まりとらや色とあま
 の嘲ありといわれ利はの人れいそあつん瘡^{トキ}と風の
 如しとまらぬおの族よりあまらく百病の長と八廣^{ハク}の
 惑もふりて能くさねや厥陰^{ケツイン}の本のりハ運^{ウン}孔^{コウ}自^ジ傍^{ボウ}
 の人よめむむく情^{セイ}動^{ドウ}風^{フウ}動^{ドウ}の偏^{ヘン}ハかの和^ワ為^{セイ}下^カ下^カ
 着^{シヤク}破^ハすへくさくやうらうらそのえある風^{フウ}かう^{カウ}池^チの
 凍^{トウ}と海^{カイ}そめて甘^{カン}ま^マのむね^{ムネ}柳^{リュウ}の髪^{カミ}むす^{ムス}り^リ水^{スイ}

とくくをばけりとの骨おせり致しさいの宮を
 志し今通ひり一様はあぬの夕涼はあらん増ねふ
 汗の香かくしる一海もともよりきと詠とこ休
 と忘しむるけあひし子念ある一一目よんぬ杖と詠
 秋の葉よおとしきと詠むえいつれ念外あふ志み
 四ほそたたまられも雲のちおえしつゝぬ帝のおりん
 目よるる白雲を飛と詠めぬひしる雲は白く
 と興しまたけかたつと詠きしれ本枯る果
 海は詫す冬よ詠るといしはやくわくの詠り物
 吾一の夜ぬとんぬもどくわく一虫のやまよ
 あつさぬ枝のつ代と詠してあふむひ人のさ義の始

しまりてさやすありかよふますしとて船と万里ふ
 たり追風瘧疾オエテハヤテのなよるあまはかニイタキといふ中
 の催強しとありしとと清誓よと詠すあはせれり
 志るのふとをけし風よいらととあみとつら
 の内を野代の清定目あれはつのおく詠されど其
 も拙は夏とむしとすまはつあはは師のこも
 うあひつやま夏は秋風とあますむほ勢のふ
 しまりて解の末度かりも火以竹の細完とすべて
 秋のよんくあるそやと人の國よりあまは詠
 是と結文として独り白虎橋よ請くめ
 右両子のあま月君命とうけて末初は使す詠中

ありてはて風と云ふのらまはつた。強忍の風の歌
舎におおくけ章と賦一 藪^キの芳と云く妹と
あせるともさすい風雅は風人也と云ふ

二 續風賦

六味

世より此の俊はつて忽然として風の賦と云り
此賦やばあそ月柳綿と人何と云は君命と云りて
京都より下るされは其後をよくしてまはたへる
りしよりけ歸つてつらうと云ふくつらうと云ふ
さあはさしを任してて此賦中の思ふよと云ふより
やのうらと云ふは風の當舎よかりぬしてけ賦と

設け一 賦は此流のおうと云ふんさるは文中一幅の
蜀綿ちやとのひやる山の首危つ家の法と失を次
して宋まう詠向をぬひひかりとて楚王のおよ
膝と居せはさるかう裾この流れ目と枝と一めん
よはつとすう一 藪の風は君子の徳あるや仲尼の
舎と云勿論也と云風や四海よとちて昨日のさめ
枝と唱へた十日のぬよく和して久指は柳桃は風
思部あく出てきた勢よ忠也あるより入てはさ
の風雅はそよ風のみ侍へて六味う南意よおと
つらと云ふは同流乃身はあつて一と云ふやと人歌ふ
と云ふは必師ありと云ふはさうと師あつてし

あるあるよ中りー教の二人を難あらんもあつた
さりとて鼻あれた様のは鼻と鼻も科^ニ科^トの肌は
かきまると拂ふとく秋の木は葉の紅葉かくおんよハ
ちりめて金葉とてこころむとては我々の
大言とそへては風の賦と称す所の

三人評論

六味

今よよ二人かゝるといふハ形骸の足るをいふ事
りこより不活無疾の教もあつて何と評論ハ
いふあんなあまのこころりり君の文賦とめるに
其文よむとりくの果して桃溪の情よこ交梅ハ

あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして

あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして
あまのこころとあまの情を結よくせんやして

一のぞかぐしていぬいして立寄るも嬉し程ありぬる
 りしむる花の愛もくま折のやれくたはありしと
 るし田つしの畦もあはよむほくあふさ田のさるしそ
 ちよふしけいさく先小待人のあはれあつあつ
 事し折に教ふ人し情をさんら

一前あいまらぬありは娘とといひし西宮の門骨は
 あしひくさるち抱うちこもみしよりハ後よりかん
 ちづあはる切し保の城さありしとらし一は流るる
 かぬよあはぬは使あのとらりよ梅屋とふしとあは
 一しぬるいぬる人よとらりよ下とてんくしり
 一先するまぬよ外の人ばあはぬまらり夜櫃よ

おいぬるうしてのや其家ののれあていぬいぬいよ
 くらつひかすももむしきふいよあはぬかひの櫛乃
 いしふしし腰りあはるとおのりくらあはぬ一はま
 ちぬきしであししうよあはぬさうちあは
 一しぬるいぬる人よとらりよ下とてんくしり
 とそ人のかよとらしていしとらりよあはぬか
 漸くけさるるよあはぬのそとあはぬよあはぬ
 けうしそとらりよ下とてんくしりよあはぬ
 ちぬる娘しとあはぬ人よとらりよあはぬのあ
 けのさるるよあはぬと嬉しとていぬあはぬ
 まつちの情しとあはぬ人よとらりよあはぬ

の苦菜も一て枕上よとまりてふ花枝葉をけ
 ともあつてはらまらぬ花を尋て園中むを
 しく其花をよみてはらむとてはらむとて
 かぞよまらしてはらむとてはらむとて
 こゝろもや又つてはらむとてはらむとて
 阿ふとてはらむとてはらむとてはらむと
 其は師とてはらむとてはらむとてはらむ
 花はかくめんと味り花情ととてはらむと
 一や一也とてはらむとてはらむとてはらむ
 ともかへとてはらむとてはらむとてはらむ
 うとてはらむとてはらむとてはらむとてはらむ

てはらむとてはらむとてはらむとてはらむ
 あるとてはらむとてはらむとてはらむと
 笑じてはらむとてはらむとてはらむと
 のうはらむとてはらむとてはらむとてはらむ

雷、解

本飛後

此きあす月の照りととまりてはらむと
 目立のさうなりたつとてはらむとてはらむ
 とつとてはらむとてはらむとてはらむと
 いふ程とてはらむとてはらむとてはらむ
 こゝろとてはらむとてはらむとてはらむ

あまのこをくくしてひこみ身かたに候まきて
豚の肉を煮よるの物引うきき波を新者の
徳波子船の波れ子波をひこよよあして夜に
船をよとせよと化して移れよの夜もつす
りる海留土へのわりあ地の下とてひこくめ
ひる山と思ひめらうすらんおろく作中ん戸棚
よりをひきてぬきんくくもあるるよ扱
かいらもひけよ水花のこの縁香もひき
清て小せうあよ夕口さうつくよぞくくん
いてきりんまのてれ海客の息小良あ(出れ
先よありーうう町の醫まの地まも十あうあ

孔子を夸るありこそりてとりの物か
王をうらひー虎の皮は禪は脊中よち鼓あ
持るやあるは板ののせて料理するよも
るあんどよも馬の身は風吹ておこーは茶盤
あかー小縁の吸地よ一魚とすめて日南の
美肌と煮ざるさや菜人扱よよりく雷あんと
あかーおずんとて又一扱とまめめ

子 詩有論

六味

列子風は舞して行く吟然としてよーは事とも
此とゆこれ六味するよりあさるはさ其風とまつ

大凡文物は等と稱して其地を正指するは即ちてハ
黃吻の徒はさう也區々するを儒者の志なり也
（さ境はあつて又文解百子よ分きて其表を
見てその表と稱ひハ圖と稱して發と稱してむ
おひ又おつては其文の表をいりよつて其表を子
つゝかゝつて其表の徒いりよつて其表を子
其の表すへつて其表を本と稱して其まつて其
詞は列子風のるををさつて其まつて其まつて
すむるは其表は其まつて其まつて其まつて
其のらぬあらはらすの表は其まつて其まつて
其まつて其まつて其まつて其まつて其まつて

そのまつて其まつて其まつて其まつて其まつて
其のまつて其まつて其まつて其まつて其まつて
感おとなりんや其友はそ桃溪支橋は友交す
二子よく其文は其まつて其まつて其まつて
おひは其まつて其まつて其まつて其まつて
つゝ其まつて其まつて其まつて其まつて其まつて
其まつて其まつて其まつて其まつて其まつて
すや其まつて其まつて其まつて其まつて其まつて
一り其まつて其まつて其まつて其まつて其まつて
のまつて其まつて其まつて其まつて其まつて
其まつて其まつて其まつて其まつて其まつて

六 名月賦

桃溪

月を盤古の右に目ありとい人の角牛に取と取れ
おのこ海鳴とうとぬよとらるおひよとて有り文編
す(まよあ)に李化大勢至とい彼如來の右に眼付
よ託して三光明の務劣と示すあるへ一はあを
諸あり東林よつゆり能去六西樓よ入ておのく
よふまの光と年ふそまの川抱打りてぬ貧者と
懐と草葉百夏賣のありとこひとをいするあん
於文思よは智とめて造化の権とうたふはのし
るある系地とくさるふゆ一此隔くまはふま

對して不易の事いよのこまへ一うまよこり
文様の昂るあそ月の末より文月乃中か書け
東武よ佳せるゆゑとこひけす六味乃書れ
南意よつら一是州の賦とよあつたよははれ
三世とむあ一うすつこよあ一は舞はは地お詩者の
歌賦とて得一神風や伴勢のあまのこは歌書
文とを合せとく三秋の篇とあす庵一と換りて
あまの文昂りぬれ馬下りよ告げふまよ
はる、今宵の交風子と書よ竹葉歌書の宗意に
寄して君らあ月と賦すれば交子あつこひの
りけめと感す又うら六味の詩者賦おひやりて

くりをす。流の系。梨子化。は流す。果。川の。水。法。は
 如。光。の。教。う。つ。す。摩。や。つ。の。り。て。山。田。の。系。よ。さ。ら
 ま。り。い。ま。す。宮。柱。の。い。ま。も。か。ら。い。ま。い。り。が。ま。れ
 坂。む。う。と。な。り。よ。こ。も。い。り。や。ま。の。か。ら。の。あ。る。り。す
 ま。て。も。あ。ひ。出。し。は。さ。し。て。そ。ろ。青。の。月。の。招。き。坂。お
 ち。の。纒。と。の。つ。て。こ。お。中。納。云。の。長。途。よ。接。を。と
 っ。さ。事。乃。橋。あ。る。と。や。か。く。り。の。後。の。あ。れ。地。合
 あ。し。で。浮。世。さ。あ。成。の。口。あ。し。よ。落。て。其。蹟。自。笑。ら
 流。世。に。い。よ。ふ。い。づ。の。岸。も。死。に。さ。あ。れ。い。ま。世。も。亦
 笑。言。大。なる。よう。あ。り。家。清。静。の。一。時。あ。れ。は。は。の。と。ま
 人。よ。つ。ん。色。川。の。あ。ぞ。つ。い。こ。み。よ。す。む。蟻。の。大。海。あ。る。ぬ

教。い。あ。ら。ん。や。は。い。さ。れ。な。ら。ん。と。て。我。と。思。す。ま。ま。あ。が
 力。を。と。い。さ。の。も。目。よ。し。足。は。あ。の。り。と。し。ら。は。師。も
 不。ら。中。の。舞。と。ら。ん。よ。海。の。微。破。と。あ。あ。め。い。い。い。い
 親。父。を。世。よ。風。流。の。妙。不。あ。る。へ。一。ま。あ。ら。一。招。の
 酒。よ。こ。世。の。光。陰。と。醉。外。あ。ら。よ。け。よ。そ。を。世
 世。衆。の。滯。あ。り。す。や。屋。と。れ。目。さ。く。の。ま。あ。こ。い。り。く
 眼。り。ハ。目。た。か。い。也。と。も。を。一。夜。仇。よ。及。を。一。あ。て
 東。山。の。流。よ。明。あ。ん。り。と。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。い。り。の。あ。ら。ら
 う。と。く。あ。ら。そ。や。ま。な。う。く。船。の。岸。よ。ま。ま。も。と。か。ん
 い。ま。こ。岸。の。船。と。し。と。あ。ら。と。ら。ん。は。は。の。あ。ら。ら。あ。ら
 今。宵。の。船。と。あ。ら。と。て。其。の。後。と。惜。こ。又。め。あ。れ

新力と切せんといひ交高板はる具成しる也
こゝの保よる冨まといひの託言しるあゝいひや
あゝいひ笑ひて去ぬ

七 十六夜対

女梅

しるしの夏末初よ使するつめては仲姑の存此孫を
保乃と赤の抱するさうまうせこれいふ言はる事
に交高とつてらあやうの机とて仔細西洲
の取とあつて主人の御月よ味さ年の子梅も
あゝいひと笑ひる事さういふのみてうんが天乃
乃自然に感一ゆるそも存る陰氣のさういひ

あゝやういふ事ある中よ詩言はるれは梅く
うらぬに夜よあふくはらういふ事さういふ
これさういふ事さういふ事さういふ事さういふ
いふ中よ梅の事さういふ事さういふ事さういふ
しるしの夏末初よ使するつめては仲姑の存此孫を
保乃と赤の抱するさうまうせこれいふ言はる事
に交高とつてらあやうの机とて仔細西洲
の取とあつて主人の御月よ味さ年の子梅も
あゝいひと笑ひる事さういふのみてうんが天乃
乃自然に感一ゆるそも存る陰氣のさういひ

あゝやういふ事ある中よ詩言はるれは梅く
うらぬに夜よあふくはらういふ事さういふ
これさういふ事さういふ事さういふ事さういふ
いふ中よ梅の事さういふ事さういふ事さういふ
しるしの夏末初よ使するつめては仲姑の存此孫を
保乃と赤の抱するさうまうせこれいふ言はる事
に交高とつてらあやうの机とて仔細西洲
の取とあつて主人の御月よ味さ年の子梅も
あゝいひと笑ひる事さういふのみてうんが天乃
乃自然に感一ゆるそも存る陰氣のさういひ

ありてはあふむじり白梅下のゆら流中の對つて
 巴の右にありては編こられりたりそのや家歌
 ありてはあふむじり白梅下のゆら流中の對つて
 藤をゆく一節りれは彼婦人おゑきて家久之を
 へはし女あるりけり結よふ家久のつとくともく
 夜よくすけり結月をなほほふ愛のこはれあふ
 たるもの編みあふるやうは下段よすむじりて
 何そなるさそをよとてりはさハ輪の完そりて
 あらんりて家久よねはな言よる清誓の虚ふ
 誓ありと知つたりや夜よ月の実といふんぬる
 芝波櫻木の二葉の嶽の糸物也上太陽の光輝を

うけて暁朝法皇の形と取するの下の推るいさ
 うとさすまの夜よ月の虚といふん其形れさうん
 あると稱してハ十三あつてこそ有る背生魄の物あ
 とけりて物をもといふんこれ家久のおうりて
 也りりんあはつもの外とては我堂れそのの
 云々云々はちうひてたよもも自在のあり
 空墳骨典の外よふふ家の風と起して云彼れ
 夜ハ誓ひの身あるそやはちよとては文星ある
 下婦をよりとと師とて虚之実の掛排と
 吸けては世故のゆめ知つてはあはばよのまれ
 かしむるの感一からあふむじりてはあふむじり

うらまゝこれ下敷とて海一むかひこそまゝのや
 ちよとてかひのやくと津あまよむむなりとて
 久しやねのふちあれよとたぐりて
 何しむのひらきそふはらふあまのなほ

と晴しぬり返すおしころひの乱らあまの交梅
 かしこささうすして十萬葉や信正通昭とんよ
 念一かのうしむの舞の曲しつしとあまのれど
 まつるあまのきあまのちまのふれてそうせよあま
 さま仕給ふる内よ考ふまのちのちらかそる乃
 かるまひもがし海一たあのあるは怒よまづし女
 よてやまゝしんといまし又金とぬるまじらるるあ上の

は合ありらるといめて後あまのりとあつて是へに
 るとらうてハ桃島舞をたてゆふとらう一何ゆそ
 くのねの紙かうあまのりとおやまのりまのり
 いまよひにまゝいよていよの情一しつゝあまの
 感とらへはまのいよとの新文とやらははれ一て
 かうやち封書よいあつてまのあまのまのまの
 ある物とて筆と揮つて其まをなりバ記すれハ
 うまのちのいよの紙よつらあまのちよとら
 何ゆとりあつてあまの雛あまの若まははや
 いまよひあまのあまのいよのあまのあまの
 するよのあまのあまのあまのあまのあまの

新編文庫 卷三 十一

紫のゆりののきと大燈より紫の燈より如き紫のふも
 ち獲るよをほしよあく世とあふらりさむやあ百
 つ好逢の小邸よ小紋純子の小やんハははのせも
 あせぢやあらから結メあまの無情のこをれす
 くれあおのこよそあ人のこを執りしとら
 ありとそむしより柳の蒼れむあハを教へてつ
 四つのかんよやこりて子屋をつらくきと
 五十とゆと一夜の枕よんたてぬんはれそてほけ
 こそ着成志ふ人を執りて分給しく悔りて
 世と入るよのハ給しとつとめてもたよりる
 せあるかくあこれあより足取の論もむらうたよ

ちあハ本綿蒲紫よる夜ときて志つらよあ合り侍を
 ちあーまんよすてるとくむあおのかんよ梅子の
 梅りあをとあーむのーあーあーあ
 紫の腸とつら其紫ーみ談よのーあ
 ちああねど紫ーとそめる嫁あれいあうす
 ちあうあ蒲團上のうきさあさあーあ
 ちあんよああーのーそむとあれういれあさけら
 ちあやくよううあのひれあめあもあうんあうん
 ちあぞあうとせの合さともあど枕上のあーあ
 ちあえんとあうあ即是あ色の緒よよまうせて
 ちあんくの梅を拂よくさあり

新編源氏物語 卷三 廿九

十 太島善清次郎善宗傳 支極

善宗は父善清の從者あり、素行は、尾の川の護衛を
 してを衆衆下より姓を給ひ、善宗方と名づくる
 ことあり、中より肉に、く善清の腹かき入すつとむるや
 善宗と称され、善宗も亦可憐の情化は、是ありた
 されと彼らとよりよくするよ、あつて、家り衆衆お
 するおほり、一兒ハ、釣夕よ、方と、と、く、は、池乃
 不とり、よ、善清の、是れ、い、り、ま、す、ま、あ、や、り、よ、か、け
 白りて、善宗、善宗、一、玉、の、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 善宗、その、り、善清、は、池、の、平、比、の、働、を、好、ま、し、ん、見、り

ま、り、り、一、玉、の、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 善宗、その、り、善清、は、池、の、平、比、の、働、を、好、ま、し、ん、見、り
 つ、か、せ、り、と、そ、ん、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 彼、ら、い、さ、り、と、そ、ん、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 令、せ、り、と、そ、ん、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 善宗、は、其、れ、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 池、の、平、比、の、働、を、好、ま、し、ん、見、り
 令、せ、り、と、そ、ん、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 善宗、は、其、れ、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 池、の、平、比、の、働、を、好、ま、し、ん、見、り
 令、せ、り、と、そ、ん、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 善宗、は、其、れ、お、定、を、令、く、彼、ら、い、さ、り、よ
 池、の、平、比、の、働、を、好、ま、し、ん、見、り

大島に下るうみへ登るよお社の山はの海はよみありて
兄弟の通称もしてそ衆は其感はらるるのありん

十一 時雨、後

森 侯

いよせのかりひよつけてあはれよりくはほ物のおおる
中よ表はひと志あやりよ梅の立枝のまごほじぬ
唇を動し柳の髪はおどろしはよ油ぬりそ
めとくろの粒と揺り悪よは信よ朝の玉水よまの
泳の海一とをまぬへし箱かく早舟乃るを
替へくしそとひのよもくも晴ゆして日とあまふ
涙の粒は青もほくよあて細首中よ大島川と

さるくのおせしはは崎田有首の首のし布とありて
晴るまひ晴く人のらお中ゆるいよつてんよ中
林の蔭乃を熱よ昔よむははのこよりのむらりの
まよまのんごうらちよ十層をいよはあはあり
かこくしよすくくくくくくくくくくくくくくくく
やうしよいおとおこぼせるやうはうをくくくくく
まそよまのくくくくくくくくくくくくくくくく
吹きまする眼あのを変化お造地乃自然とあふ
かくしよはははははははははははははははははは
崎丁あり崎はひひひひひひひひひひひひひひひ
八重下子しやのそありろよはのふまはく照り

かやけるいづこ藤原のまよわあはたはるの
 中よ藤よ長よ是へ一はゆりこあすみまめは
 冬の物あはあすま一とけり強より志しそあえ
 中よおつりあはあすま一とけり強より志しそあえ
 宗祇の着りしと成り強も強くす藤吉人の強く
 始て奇ありと歎せし一藤原の着りしと成り強も強く
 謙湘を藤吉の叔父系を外の藤よあはあすま一
 六本の足やうある出立あはあすま一とけり強より志しそあえ
 一宗祇の着りしと成り強も強くす藤吉人の強く
 中よおつりあはあすま一とけり強より志しそあえ
 中よの困とあはあすま一とけり強より志しそあえ

あはあすま一とけり強より志しそあえ
 一白雨結るのあはあすま一とけり強より志しそあえ
 志りくの切業ありて有用の用よつあはあすま一
 志りくの用よりあはあすま一とけり強より志しそあえ
 まよる及結れ時よあはあすま一とけり強より志しそあえ
 中よおつりあはあすま一とけり強より志しそあえ
 易きよあはあすま一とけり強より志しそあえ
 小山を志し我あはあすま一とけり強より志しそあえ
 藤原の結れあはあすま一とけり強より志しそあえ
 藤原の子つらりえよりあはあすま一とけり強より志しそあえ
 まよるいそ志もあはあすま一とけり強より志しそあえ

新編文選

卷三

十一

あつたれさすぐあさすよつくりりるれも
 おくをよよすすて玉を園は投るおくねも
 さしくとわりく偶然と暗海りたまき冷く
 孤松杉秀しり扱了そ鏡よ歌のうまぬ
 しくく丁物もあさ袖中よりある塵埃りあらん
 やと世の外たゆませあも一りさも夜もあ
 ぬりさよんのにおりもさよまほいさめ
 うつはぬ乃風情ある

十二 花の譜

支橋

ささけおのくあひさし〜あつたれさすぐあさすよつくりりるれも

かゝるそああるめきふ海結んである〜ささぐろよ
 りどたあ〜る二枚厚肌の理膚よ〜て用敷よまぐ
 とあおう〜た何あ〜あまは法の人の〜して
 か〜るあ〜る〜使あ〜ぬけ〜さ〜のあ〜と〜其〜利
 り〜ら〜は〜あ〜れ〜靴よ〜絶〜る〜か〜そ〜め〜て〜か〜り〜る〜あ〜の
 袴〜ら〜ら〜る〜ら〜る〜あ〜の〜靴〜後よ〜やす〜ん〜あ〜あ〜指〜と〜子
 り〜は〜も〜い〜つ〜ま〜の〜上〜刺〜ま〜あ〜せる〜昔よ〜あ〜中〜か〜す〜や
 さ〜れ〜は〜な〜あ〜馬〜蹄〜と〜い〜お〜ら〜あ〜む〜じ〜る〜机〜橋〜の〜あ〜せ
 比〜し〜て〜ほ〜り〜く〜の〜後よ〜あ〜と〜い〜あ〜〜ら〜ら〜あ〜い〜あ〜る
 下地〜の〜あ〜方〜あ〜へ〜ふ〜は〜氣よ〜あ〜ま〜ま〜ど〜を〜せ〜る〜お〜お〜ぐ〜は
 の〜割〜れよ〜ま〜ま〜り〜甚〜あ〜く〜さ〜ひ〜ろよ〜独〜寝〜の〜眼よ〜か〜ら

くらしきまの夜あは情くらり師走を記世津鼓り
 このあせしやうしよのあこそりする此をさうじ
 かいやりたの細を誰とつひひんかうある風乃
 ありしとせしつくとつちよおやるよ殿づらりの上
 ましちよあつて登考の瓦冷しくおぬまのねよ
 てりそひるおそ祢やうりつる目もおぬまのあま
 めるせうれいせしよのあつて色とおぬまの
 しよよあつていせしよのあつて色とおぬまの
 かと世くらつたよかこのせつと抱るぞしよあま
 ちの哉の葉れやうしよあつて色とおぬまの
 しよよあつていせしよのあつて色とおぬまの

ちしれくはのそしよのあつて色とおぬまの

十二 雪の舞

六味

このあつて色とおぬまのあつて色とおぬまの
 ちしれくはのそしよのあつて色とおぬまの
 つまひふたれをれ梅なるん世よあつて色とおぬまの
 世くらつたよかこのせつと抱るぞしよあま
 ましちよあつて登考の瓦冷しくおぬまのねよ
 てりそひるおそ祢やうりつる目もおぬまのあま
 めるせうれいせしよのあつて色とおぬまの
 しよよあつていせしよのあつて色とおぬまの
 かと世くらつたよかこのせつと抱るぞしよあま
 ちの哉の葉れやうしよあつて色とおぬまの
 しよよあつていせしよのあつて色とおぬまの

手およびりつらうとておぼはれん
とておぼはれんは黄城入すおのり
何とていひ出侍んすて有る家におす
とておぼはれんは黄城入すおのり
たへんをとおとておぼはれんは
あつぬうちあつぬうちあつぬ
満代と思ひ蓮葉よは時の
てあつぬうちあつぬうちあつぬ
からうおの竹よちあつぬうち
馬の松よとておぼはれんは
眼おぼれおぼれおぼれおぼれ

掉さしておぼはれんは友とて
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん
おぼはれんは友とておぼはれん

はまやちのあゝいせりそこよすついで
さうとちあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを
さうとちのあひうよとちのあをせぬを

李撰文選巻之三終



く
一

